

【論文】

## 立命館禁衛隊創設と学園経営

木多 悠介

### はじめに

本稿の目的は、立命館学園経営という視座から立命館禁衛隊（以下、禁衛隊）創設の意図を立命館学園経営との関係から考察し、禁衛隊の性質を明らかにすることにある。禁衛隊とは、一九二八（昭和三）年の昭和天皇即位の御大典に際して、御所警衛の奉仕をするために立命館学園を挙げて編成されたものである。この禁衛隊創設の意図とその性質については、『立命館百年史』（以下、『百年史』）での記述が現在主要な理解となっている。ここでは、禁衛隊創設の理由について、金融恐慌を背景とする社会主義運動、労働運動、農民運動への対応を挙げている。つまり、労働争議や小作争議が頻発する世相の中で、立命館教学の指針を打ち出すために創設されたのが禁衛隊であり、その活動を通じて、教育勅語の精神に基づく国家主義的な教育理念を生徒・学生に浸透させようとしたと理解されてきた。そして、このような創設理念を前提とした禁衛隊理解は、昭和戦前期の立命館学園に対して抱かれる、国家主義的・軍国主義的学園というイメージを裏付

けるものとして機能しているといつてよい。(一〇)

これに対して、「立命館禁衛隊は国家主義的と言われるが、案外と時世を先取りした外部に対するものではなかったか<sup>(三)</sup>」と一定の留保をつける必要性や、「禁衛隊は実際どういふことをやり、どういふふう<sup>(四)</sup>に学生に影響を与え、学校の体制にどういふ関係を持つていたかを、具体的に明らかにする必要がある」と、実態に基づいた禁衛隊の評価をおこなう必要性が早い時期から唱えられていた<sup>(三)</sup>。近年になり、寺澤優によつて立命館学園経営者である中川小十郎の関東大震災被災体験から、禁衛隊創設の意図を考察した研究がおこなわれたのも、この動向の中に位置づけられる<sup>(四)</sup>。しかし、いまだに禁衛隊創設の意図と、その性質が解明されているとは言い難い研究状況にあるのも、また事実である。

このような研究状況となつた要因は、史料的な制約にある。禁衛隊創設を主導した中川及び学園首脳部は、禁衛隊創設の理由について「御大典ノ盛儀ニ方リ禁闕守衛ノ赤誠ヲ捧ケンカ為<sup>(五)</sup>」、「御即位大礼の時に際して、蔭ながら禁苑傍近の非常警戒に当らんがため<sup>(六)</sup>」と理念的にしか語つておらず、自然、禁衛隊の皇室中心主義の教育理念のみが強調される結果となつた。また『百年史』においては、立命館学園経営における中川の指導力や思想が重要視され、中川の皇室中心主義の思想に沿つて禁衛隊は理解されてきた。結果、これまで禁衛隊の活動を教学の指針としたこと以上の言及はない。これらの問題に対して、本稿は禁衛隊創設の意図とその性質を、立命館学園の経営との関わりから考察することにより、これらの問題を乗り越えようとする。禁衛隊は立命館大学・立命館中学という、当時の立命館学園全体で編成されたものである。また、禁衛隊が創設された時期の立命館学園は、経営者中川の下で、大学昇格に伴う学園全体の拡充を進めていた時

期でもあった。そのため、学園経営との関係を考慮せずに、禁衛隊の性質等を評価することはできない。無  
論、禁衛隊に教育的効果を期待していたことに異論はない。禁衛隊要領に「七、随時各部隊ノ召集ヲナシ必  
要ナル訓示ヲ与へ、若クハ適切ナル講演講話ヲナスモノトス<sup>(七)</sup>」とあることからそれは窺える。ただ、中  
川の思想から離れて、学園経営の中に禁衛隊を位置づけることには相応の意味があるだろう。故に、本稿で  
は禁衛隊の理念的な面の活用状況は一旦措き、組織としての禁衛隊が学園経営上、どのような位置づけにあっ  
たのかのみを考察の対象とすることにした。

そこで本稿では、御大典が終了し、禁衛隊の奉仕活動も終了した際、中川が禁衛隊に対しておこなった次  
の訓示の、「効果」という部分に注目する。

禁衛隊の勤務は終る。予が私かに期したるよりは遥かに大なる効果を収め得たるを欣幸とす。立命館学  
園を経営する事茲に三十年、始めてそのスピリットを発見するを得たり。その立命館学園のスピリッ  
トとは何ぞ。そは立命館禁衛隊の精神なり。<sup>(八)</sup>

ここにみられる、中川が得た期待以上の「効果」とは、「立命館禁衛隊の精神」の発見であり、教学の指針の  
発見であると理解されてきたと思われる。この精神に代表される理念が、立命館学園の教育において重要視  
されていたことに異論はない。だが一方で、本論中で確認していくように、この御大典以後数年にわたり、禁  
衛隊の活動や教学への利用は、中川が「立命館禁衛隊の精神」獲得を当初から期待していたとは思えないほ

どに低調なものであった。では、中川が当初禁衛隊に期待し、期待以上のものとなった「効果」とはなんであるうか。これは、学園経営との関連のなから明らかにすることができるであろうし、それによって、禁衛隊創設の意図と、禁衛隊の性質を明らかにすることができるであろう。

## 第一章 大学昇格と経営問題

### 第一節 大学昇格と施設拡充

一九一八（大正七）年の大学令公布により、私立大学認可の道が開かれた。立命館大学においては、中川を初めとする首脳部は大学昇格に消極的であったが、卒業生から成る校友会は母校の大学昇格を熱望し、結局中川たちも校友会に押し切られる形で大学昇格へと舵を切ることとなる。そして、一九二二（大正一一）年に立命館大学は大学令による大学へと昇格した<sup>（九）</sup>。

大学昇格については校友に押し切られた中川であったが、昇格後は大学としての内実を整えるため、施設の整備拡充を急速に進めていくこととなる。まず一九二四（大正一三）年に、大学昇格の条件の一つでもあった蔵書充実にともない、工費三万五千円を投じ、これを収める三階建て鉄筋コンクリート造の書庫を正門左方に建築した。一九二六（昭和元）年には、書庫に隣接して、同じく三階建て鉄筋コンクリート造の事務室・学生閲覧室として使われる養性館が建築された。これも工費は三万五千円であった。次いで、校舎の建築が開始される。大学敷地北部に、鉄筋コンクリート造の四階建て一二教室を擁する尽心館を工費十万円をかけ

て建築した。続いて一九二八年、その南側にあった旧立命館中学校校舎を取り壊し、鉄筋コンクリート造の校舎を建築した。これは一七の教室に四つの小部屋を持つ大規模な校舎であり、工費は実に二五万円を費やした大工事でもあった。この他にも、敷地の拡張がおこなわれ、東側に約二六〇坪の敷地を入手し、ここには立命館出版部と食堂が新たに建築されたのであった。これら大学施設はそのほぼすべてが鉄筋コンクリート造であった。これは関東大震災に被災し、「建築物は最近落成せるものを除くの外は、率ね木骨煉瓦造にして耐震力薄弱なるを以て、第一震と同時に屋根瓦の崩落、内外壁の破損墜落、窓硝子の破壊等の被害著しかりき<sup>(一〇)</sup>」という東京帝国大学の惨状を見聞し、「東大の図書館が焼け、五十万冊の書籍を灰燼にしたことは遺憾千万<sup>(一一)</sup>」との想いを抱いた中川が、地震対策としておこなったものではないかと考えられる<sup>(一二)</sup>。

大学昇格による変化は学園全体にも及んだ。立命館中学校は大学昇格決定前から生徒の定員を段階的に増やしていたが、昇格が認定された一九二二年時点で七〇〇名の定員を擁していた。また、中学校はこれまで大学と施設を併用していたのだが、大学昇格を期に手狭となった広小路学舎からの移転をすることとなったのである。この中学校移転のために、一九二二年より上京区小山上総町に二千一七三坪の広大な敷地が購入され、ここに木造二階建て、教室数一二の校舎が建築され、中学校生徒のうち三年生以下がまず移された。次いで、隣接地である小山大野の敷地六〇〇坪を購入し、ここには木造二階建ての教室棟と物理・化学の特別教室棟校舎の二棟を建築し、一九二三（大正一二）年に落成した。この敷地購入に一万九千五〇〇円を、校舎建築には二万九千七〇〇円が支払われた。さらに木造平屋建の中学校事務職員室、並びに道場を建築し、一九二四年に落成した。これに要した工費は一万六千七〇〇円であった<sup>(一三)</sup>。

このような施設整備が一段落した後には、学園のグラウンドの確保、整備も進められた。立命館学園にはグラウンドがなかったため、学生の不満となっていた。これを解決するため、一九二八年、上加茂神社所有の六千一九九坪を三万一千円余りで購入したのである。翌年には隣接地の一三七坪と一一四坪をそれぞれ購入し、グラウンド用地とした。グラウンドの整備は伏見工兵隊の手を借りつつおこなわれ、完成したのである（二四）。

## 第二節 学園経営問題

右のように、立命館学園は大学昇格を契機として、学園全体の施設拡充を進めていた。しかし、一方でこのような急激な施設整備とそのため資金投入は、学園の経営上大きな負担となっていた。ただ、これは学園の設備拡充だけが原因ではない。大学昇格にあたって文部省に供出する規定となっていた供託金の支払いが最大の負担となっていた。供出すべき金額は五〇万円であり、このうち半額の二五万円はこれまでに納めていた。しかし、残額は以後毎年の分割払いとなっており、この支払いが難航していたのである。一九二八年分は中川家から借り受けた不動産を担保として銀行から借り受けた四万円でなんとか支払われたが、一九二九（昭和四）年分に至っては支出することができず、校友会への寄付金募集によって賄う有様であった<sup>二五</sup>。しかし、この寄付金募集も弥縫策に終わったのか、一九三〇（昭和五）年三月一七日の読売新聞夕刊では「金払ひの悪い大学にお灸」という見出しで、専修大学や関西大学とともに、立命館大学が二五万円分の供託金を大正一四年以来未払いで放置しており、文部省は支払い督促の上でなおも納入しない場合は認可

を取り消す意向である、と報道している<sup>(二六)</sup>。大正一四年以来供託金が未納というのは誤りだろうが、供託金支払いが二九年以降滞っていたのであろうことは、これまでの経緯から容易に想像できる。

二九年分の供託金を寄付金によって賄ったように、学園施設の拡充も寄付金募集にたのむところが大きかった。例えば、中学校施設の移設、増築に関しては次のように寄付金を募っている。

我立命館大学昇格以来は江湖諸彦の甚大なる御同情に依り既に計画の一部を完成致しましたことを茲に更めて深厚なる謝意を表します。併しながらこは只だ焦眉の急に応ずる中学増築の完成でありまして尚其他に至急施設を要する幾多の重大計画が在ります。此上御迷惑とは拝察致しますが之等の事情を御賢察下さいまして母校の拡張計画達成の為に大いに御援助を蒙り此等事業を急速に完成し母校の基礎を鞏固に為し以て国家文教の為に益々貢献したいと存じます。<sup>(二七)</sup>

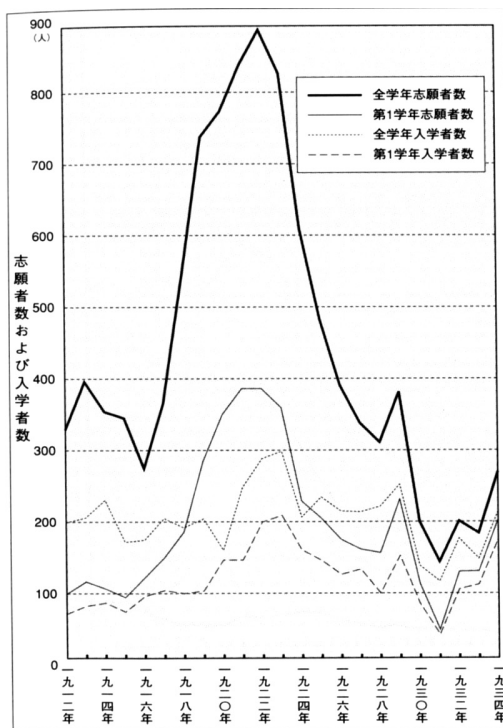
グラウンドの造成についても同様に寄付金を募集しており<sup>(二八)</sup>、立命館学園は供託金支払いのために寄付金募集をおこなうのみならず、学園施設拡充のためにも寄付金募集をおこなう始末であった。このような寄付金頼みの泥縄式の資金繰りをおこなわざるを得なくなった背景には、意図せぬ大学昇格への対応を迫られたこととともに、立命館学園の経済基盤の脆弱さが挙げられる。財閥や宗教団体を経営母体としていない立命館学園は、生徒・学生からの授業料が主要な収入源であった<sup>(二九)</sup>。これは学生数が増えなければ収入が増加せず、支出できる資金も増えないことを意味する。

施設拡充自体は、学園全体として必要な積極経営であったが、それも財政的な裏づけがなければ、一転して放漫経営の誹りを受けても仕方のないものである。無論、中川を始めとする学園経営陣も無為無策ではなかった。立命館中学校の定員を段階的に増加させていたのも、授業料収入を拡大させるための一手であったと考えられる。確かに、一九一六（大正五）年以来立命館中学入学者数は増加傾向にあり、一九一六年には一〇〇名前後であった入学者数は一九二二年には二〇〇名以上に倍増していた。しかし、これも第一次世界

大戦終戦とともに訪れた戦後恐慌、その後の金融恐慌による経済状況の悪化によって、裏目に出てしまう。特に、立命館中学への入学者は減少の一途をたどり、一九二八年には入学者数一〇一名となり、中学の移転をおこなった一九二二年の半分にまで減ってしまったのである（表一、二）。

この一九二二年以降の中学校入学者数の激減という現象は、立命館中学のみにもみられるものではなかった。京都、紫野、聖峰、両洋は、立命館

表一 立命館中学志願者数と入学者数の推移（『百年史』382頁より引用）



（『京都府統計書』『京都府公文書』『京都市統計書』より作成）

註. 入学者数に臨時入学者数は含まない。



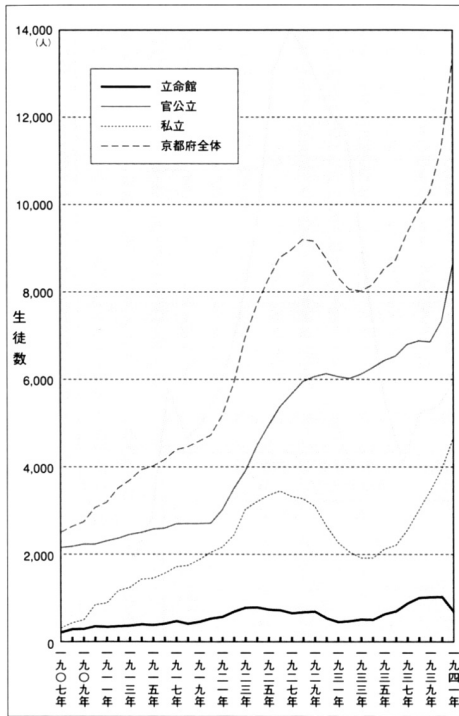
表二 京都の私立中学校第一学年の志願者・入学者数の推移（『百年史』384頁より引用）

(単位：人)

	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928
同志社	200/734	—	261/743	310/698	283/626	271/571	320/643
平安	187/449	187/353	210/248	203/376	200/324	201/299	200/270
東山	157/246	155/230	181/253	186/265	156/246	151/194	119/145
京都	100/191	91/144	90/138	54/99	56/76	53/81	45/77
紫野	108/179	—	92/195	74/120	44/48	36/38	19/20
大谷	112/148	147/158	144/157	160/184	151/181	96/118	99/131
真言宗京都	59/71	—	76/76	117/133	147/187	118/152	94/113
聖峰	42/62	—	51/74	90/100	39/58	23/31	23/31
両洋	—	—	143/393	99/135	92/124	52/113	52/52
花園	—	—	—	56/63	123/143	70/85	46/57
立命館	200/388	211/366	164/234	150/208	129/179	135/163	101/157

（『京都府統計書』『京都府公文書』『京都市統計書』より作成）  
 註：数字は第1学年の入学者数/志願者数を示す。ともに本科のみ。—は不明あるいは未開校。

表三 京都府下中学校生徒数と立命館中学校生徒数推移（『百年史』381頁より引用）



（『文部省年報』『京都府統計書』『京都府公文書』『京都市統計書』より作成）  
 註：1935-1941年は補習科を含まない。

中学同様に入学生徒数を半減させ、東山、大谷、真言宗京都などは最盛期から五〇名前後の入学者減となっている。一方で、同志社や平安はその中でも入学者数を増加・維持させている（表二）。なお、京都府下の公立中学校全体の生徒数は、私立中学校のような激減をみせていない（表三）。つまり、入学者数減少やそれによる生徒数の減少という事象は、私立中学校に特有のもので、さらにそのなかで生徒獲得競争が起こった結果、入学者数を増加・維持できた一部の学校と、大幅に減少させてしまった学校とが生まれており、立命館は後者であったのだ。このように、学園唯一の財政基盤は急速に掘り崩されつつあった。にもかかわらず、大学

昇格にとまなう供託金支払いと学園施設拡充という大事業を、学園は完遂せねばならなかったのである。

なお、中学校の生徒数が激減していく一方で、大学の学生数は逆に増加していたことには注目してよいだろう。一九二三年に大学令による大学予科が設置され、翌年には学部が設置されたが、この時点で学部、予科、専門部全体の学生数は一二三〇人であり、以後も生徒数は増加し続け一九二八年には一七八八人の学生を擁するに至っている<sup>(三〇)</sup>。大学側の経営は順調であった。だが、学園の経営難は、大学の学生数増と並行して発生している。やはり、学園経営のネックとなっていたのは中学における入学者数の減少と考えてよからう。ここにおいて、中川をはじめとする学園経営者は、経営難を緩和・解消するために、激減していく中学生徒数を増加させることが必要となったのである。

## 第二章 禁衛隊の創設とその「効果」

### 第一節 禁衛隊創設とその活動

前述のような、中学生徒数の減少にとまなう劣悪な経済状況の中にあつた立命館学園でおこなわれたのが、御大典に際して御所周囲を警衛する禁衛隊の結成であつた。禁衛隊を結成した意図や、その性質については次節で考察することとし、ここでは考察の前提となる禁衛隊の活動を確認しておく。中川は「御大典ノ盛儀ニ方リ禁闕守衛ノ赤誠ヲ捧ケンカ為ニ立命館禁衛隊ヲ編成<sup>(三一)</sup>」し、御所に天皇駐輦の間は職員と大学生・中学生徒からなる禁衛隊が、昼夜を通して御所の周囲を警衛することを決定した。実際に禁衛隊を組織するに

あたっては、学園の配属将校たちを禁衛隊の嘱託として任用し、彼らと学園側が協議し、組織編成と服務計画が立案された<sup>(二二)</sup>。ここでは禁衛隊の総司令に立命館大学学長田島錦治、参謀長に中川が就任、その下に大学と中学の配属将校と教員及び学園経営陣が参謀や庶務係等の隊幹部として配属。大学と中学の学生、生徒は銃隊と杖術隊を主力として、その他剣道隊、柔道隊、軍楽隊、自転車隊に編成された<sup>(二三)</sup>。

このようにして創設された禁衛隊は、体育や軍事教練の時間を使用して行進などの訓練をおこない、御大典のために天皇が京都に駐輦する一月七日から二六日までの期間、御所周囲警衛の任に就いた。中学校生徒は昼間に、大学学生は午後五時から一時までの前半夜と午後一時から午前五時までの後半夜という二交代制で勤務をおこなった<sup>(二四)</sup>。この二〇日間の勤務において、禁衛隊及び立命館は、近衛歩兵第一連隊と第三連隊、警視庁警官隊を大学構内で接待している。また、一八日には大礼使事務官の木下侍従による禁衛隊の視察、二四日には久邇宮大將付き武官の大沼大佐が立命館を来訪し、勤務最終日の二五日には一木喜徳郎宮内大臣が禁衛隊本部に来訪した<sup>(二五)</sup>。このように、立命館と禁衛隊は軍・警察や宮内省関係者との繋がりを保ちながら、活動をおこなっていたのである。

禁衛隊の活動は右のようにおこなわれていたわけだが、これは当初から世間の注目を集めていたようである。まず、一〇月一七日の『東京朝日新聞』に「学生の謹衛隊<sup>マ</sup>」として、立命館大学が中学と合同して、大学長田島錦治指揮の下、天皇の京都駐輦中御所周囲を巡回する計画であるとの報道がなされた<sup>(二六)</sup>。地元である京都においては、『京都日出新聞』に次のように取り上げられている。

最近世相頗る陰鬱にして、思想国難、政治国難の声荐りなるに当り、時代の重きに任ずべき智識あり教養ある青年が澆漓たる意気を以て、此の時代の革新に精進すべき筈の士氣を失ひ邦家の将来を思ふ者をして限りなき不安を抱かしめつつあるに際し、近頃最も快事とすべきは立命館大学三千の学生が、聖上御駐輦中警衛のため禁衛隊を組織し、禁闕の守衛に任ずべく学生総てを挙げ血盟に自署して宣誓したと云ふ事である。(二七)

ここにみられるように、立命館学園による禁衛隊結成は注目を集めるとともに、好意的に取り上げられていたといえる。

また、実際の御所周囲警衛の任務も世人の関心を集めていた。禁衛隊勤務の初日である十一月七日の、大學生による前半夜勤務の様子について、『立命館学誌』は次のように記している。

市民の未だ寝もやらぬ時刻なれば、路上の住反織るが如し。火路傍焰太鼓の裝飾もあでやかに、普天の下卒土の浜、国民を挙げて国の歡喜に陶醉し、聖寿万歳撃壤の声巷に満つ。その間を縫ひて我が禁衛隊は行進するなり。(中略)市民は車上より、店頭より、或は街頭より吾人を注視す。時に新聞社の写真班ありてフラッシュを浴せたり。(二八)

この他に、一〇日の即位礼当日には禁衛隊の総行進がおこなわれた。これは中学生徒隊と大学生隊がともに

御所周囲を一巡するもので、「両側に観衆溢れ」る「交通頻繁なる街路」を軍楽隊の行進曲のもとに行進するという大がかりなものであった<sup>(三九)</sup>。このように、御大典のために各地から参集して来た群衆の目の前で、禁衛隊は連日の活動をおこなっていたのである。そして、このような目立つ活動は、先の史料に「新聞社の写真班ありてフラスシュを浴せたり」とあるように、一般市民のみならず、御大典の報道のために京都に集まっていたメディアの前でおこなわれたものでもあった。例えば『東京朝日新聞』は即位礼がおこなわれた十一月一日の夕刊において、「御所付近を守る立命館中学生の禁衛隊」という見出しで、当日の昼間勤務に就く立命館中学生の写真を大きく掲載している(写真)。関西の新聞では大阪朝日、大阪毎日等が禁衛隊の活動を報道したという<sup>(四〇)</sup>。このように、禁衛隊の活動は京都内外のメディアに注目され、全国に立命館の名前とともに報道されていたのである。それは「立命館禁衛隊」の名の伝播は其の地理的範囲、京都市及び其の近郊の地域に限り、精々関西地方に限らる可しとの吾人の予想はもろくも裏切られぬ。吾が禁衛隊の名声は滔々として洪水の如く殆んど全国を掩はんと

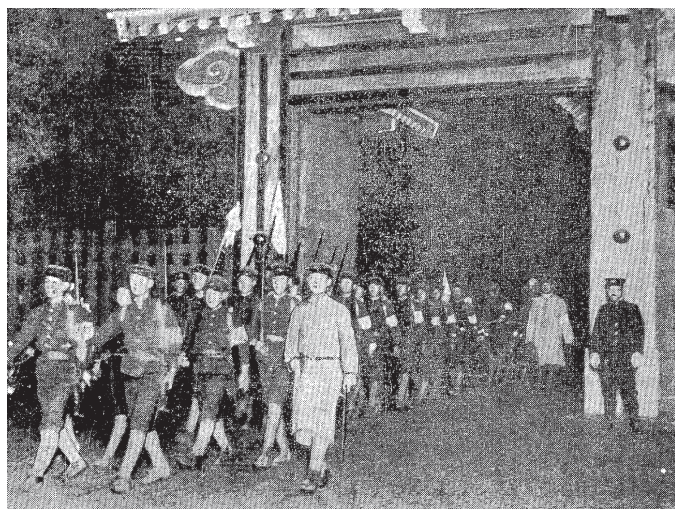


写真 立命館中学生の禁衛隊(『東京朝日新聞』1928年11月10日夕刊)

禁

す<sup>(三二)</sup>」と評されるものであった。一月二六日、御所で天皇の還幸を見送った中川は、禁衛隊を前にして「禁衛隊の勤務は終る。予が私かに期したるよりは遥かに大なる効果を収め得たるを欣幸とす<sup>(三三)</sup>」と語った。この「効果」が表れるのは、翌年のことであった。

## 第二節 禁衛隊の「効果」

さて、御大典における禁衛隊の活動を通じて、中川が得た「効果」とはなんであろうか。『百年史』において、御大典を機に創設された禁衛隊は、その後も各種学校行事や教練において利用され、「昭和戦前期の立命館の一つの特色」となったと理解されている<sup>(三四)</sup>。ここから、この「効果」とは立命館学園の教学の指針としての「立命館禁衛隊の精神」の発見であると解されてきたように思われる。確かに、これ以後、立命館学園に入学した者は全員禁衛隊に参加することになり、御所奉仕活動一周年となる一九三二（昭和七）年一月一〇日には、奉仕活動への御下賜金をもとに製作された禁衛隊旗の授与式がおこなわれている。禁衛隊活動およびその活動精神は、立命館学園の教学の指針として据えられたかにみえる。だが、具体的に禁衛隊がどのような活動や教学上の利用をされていたのかを確認すると、このような理解には疑問を抱かざるを得なくなる。立命館大学機関紙『立命館学誌』と、立命館中学及び立命館商業学校機関紙『立命館禁衛隊』を確認したところ、御大典翌年の一九二九年から一九三二年にかけて、禁衛隊の活動は非常に低調である。禁衛隊については、新年や入学・卒業式における訓示で御大典での活動やその理念が強調されるのみであり、教学への利用がおこなわれているかという点、首を傾げざるを得ない<sup>(三五)</sup>。

禁衛隊創設を主導した中川の意識からも、禁衛隊の低調な活動ぶりや、教学への利用に対する混乱を裏づけることができる。御大典翌年、中川は「立命館大学の禁衛隊は、その後も解隊したのでなく、只非常時の活動を休止してゐる訳である」と断つた上で次のように述べている。

されば学園に於ても全館の学生に禁衛隊精神を弛緩せしめぬやふな何かの鞭撻と鼓勵を平時に与へて置かねばならぬ。(中略) 如何に学園の主義生命であると鼓吹しても、祝日や記念式など一年に数回しかない儀式の時だけ禁衛隊精神を高調するのでは空文虚礼ともなり形式化して了ふ嫌いがある(中略) 併し之が実行方法は如何と云ふ段になると有効至善の方策は仲々あり得ないので、実は教務当局者間に於ても悩んだ問題であつた(三五)

ここから、禁衛隊が既に解隊されたと考えられるほど活動が低調であり、式典において禁衛隊精神が強調されるのみであつたこと。禁衛隊の日頃の具体的活動について、当局者も考えあぐねていたということがわかる。この文章は一九二九年九月の『立命館学誌』に掲載されており、文章が八月時点で書かれたとしても、御大典以後実に約九か月もの間、禁衛隊は教学に組み込まれない名ばかりの存在であつたということになる。中川は、その対策として近畿の皇陵巡拝を学園の年中行事に加え、大学生は任意に、中学生は修学旅行としてこれをおこなうことにしたいと結んでいる。だが、その後、中学校長塩崎達人が「校庭或は校外に於て隊伍を組みたる時のみ禁衛隊とし又は演習行軍のためのみするものの如く考へて、その他の時、別して教室内は

全然別世界で断然禁衛隊には無関係とする者なしとせぬやに聞き及び頗る遺憾<sup>三五六</sup>と生徒に對して訓諭しているように、これも実態としては従来の教練や校外活動に禁衛隊の名を冠したに過ぎないというのが実情のようである。組織としての禁衛隊を、教学にどうにかして組み込もうと苦心する様がよくわかる。以上の実態は、禁衛隊を立命館教学の指針とするために結成したと考えるには、余りにお粗末な状況ではないだろうか。

また、禁衛隊が「編成」されたものとして学園側から扱われているということにも、留意しておく必要がある。軍事用語としての「編成」とは、必要に応じて一時的に組織を構成させることを指す語である。先に確認したように、禁衛隊は配属将校の協力のもとで計画が立案され、司令部や参謀部が置かれるなど、軍事組織を模して作られている。つまり、軍事の専門家たる将校と共に計画した上で、「編成」の語が使われている以上、禁衛隊はそもそも永続的に設置するつもりのない、御大典警衛のためのその場限りのものではなかったかと考えられる。「禁衛隊要領」においても、「一、禁衛隊ハ京都御駐輦ノ間昼夜ヲ通シテ服務スルモ成ルヘク<sup>三七</sup>」と、禁衛隊服務の期間は天皇の京都御所駐輦中に限られている。つまり、禁衛隊を結成した時点では、中川や学園首脳部には教学への利用も含めて、組織としての禁衛隊を中・長期的に活用する意図がなかったのではないかと考えられるのである。

さらに、御所および天皇の警備を近衛兵や警察が嚴重におこなう御大典において、いくら「禁闕守衛ノ赤誠ヲ捧ケンカ為」とはいえ、禁衛隊のような民間の警衛組織が活動をおこなっていたのは特異なことである。これは、立命館経営者の中川が、元老西園寺公望の秘書であり、宮内大臣一木喜徳郎の友人であるという人



脈を最大限に利用し、宮中や行政側と連携したことによって可能となったと考えられる。だが、そうまでしておこなった禁衛隊の活動が、教学の指針確立のためのものと、単純に考えてよいのであろうか。そのような意図もあったことまでは否定しないが、仮にこれを是とするならば、それ以後の教学での禁衛隊の利用の低調さや杜撰さの理由が理解できなくなる。これでは、中川は立命館教学の指針確立のために、自身の持つ人脈を活用して禁衛隊の活動をおこなったが、その後の教育上の利用については無計画であったことになってしまう。

ならば、中川及び学園が禁衛隊に期待し、御大典における活動を通じて得た「効果」とはなんであるか。それは、学園の知名度上昇であり、結果的には学園の特に中学の経営状況の改善であったと考えられる。御大典が終了し、年度が変わった一九二九年、立命館学園の入学者数は大幅な増加を見た。入学者数は学園全体ではほぼ一六〇〇名に達し、入学者数減少が顕著であった中学では、新たに併設された商業学校と合わせ、志願者数三九七名、入学者数二二六名という大幅な回復をみせたのである<sup>(三六)</sup>(表一)。これはやはり、御大典における禁衛隊の活動が報道されたことにより、立命館の名前が江湖に流布されたことと無関係ではあるまい。中川が結成当初の禁衛隊に期待していた「効果」とは、御大典という国を挙げての祭礼の場で広告塔となり、立命館の名前を売ることであったと考えられる。当初その効果範囲は「京都市及び其の近郊の地域に限り、精々関西地方に限らる可し」と考えられていたが、結果としては『東京朝日』に取り上げられるなど「禁衛隊の名声は滔々として洪水の如く殆んど全国を掩はんとす」という、中川が「私かに期したるよりは遙かに大なる効果を収め得た」のである<sup>(三九)</sup>。その結果は、入学者数の大幅な増加という形で表れたので

ある。御大典の場でおこなう、立命館学園経営改善のための乾坤一擲の宣伝活動。そうであるならば、教員面での禁衛隊の活動・利用の低調さも理解できる。そもそも、禁衛隊はそのような利用を考えられてはいなかったのである。

では、御大典における広告塔に過ぎなかったはずの禁衛隊が、学園教学の中心となり、昭和戦前期立命館の特色とまで目されるようになったのはなぜか。これもまた、学園経営上の要請であったと考えられる。禁衛隊効果により、一九二九年の入学者は増加した。しかし、一九三〇年、再び中学、商業学校の入学者が減少したのである。募集定員各一五〇名に対して、入学者数は中学八七名、商業一三九名であった。翌一九三一年はさらに悪化し、各一五〇名の定員に、中学四六名、商業九八名という落ち込みをみせたのである〔四〇〕。この中学入学者数は、最も入学者数が減少した一九二八年の一〇一名の半分以下であり、ただでさえ深刻であった学園経営がさらに圧迫されることとなる。

ここで立命館学園は再び禁衛隊を前面に押し出した。満州事変最中の一月一九日に大学、中学、商業の学生・生徒及び全教職員からなる禁衛隊が、「愛国総行進」と銘打ち、烏丸通、四条通、河原町通といった京都市中心部を行進しながら檄文を配布するというパフォーマンスをおこなったのである。意図としては、御大典の際と同様の広告効果を狙ったものとみてよからう。結果としては、翌一九三二年、立命館学園は中学一〇七名、商業一一二名、各学年への編入者を合わせれば二八四名という多数の入学生を獲得したのである〔四一〕。そしてこれを機に、御大典限りの広告塔であったはずの禁衛隊は、立命館が常に掲げる看板として学園内外に定着していったと考えられる。御大典という場でなくとも、禁衛隊の宣伝は効力を持つことが実証

されたのである。

さらに、禁衛隊という看板は入学者数増加以外にも、「立命館ブランド」の誕生という、経営上の効果を生み出すこととなる。これにつき、中学・商業の生徒に対して中川は次のように述べている。

立命館は現今評判が良い。君等が司法省にでも行く時は私の紹介状は最も効果がある。「三十年になつても立命館は思想的犯罪者がない。其処を出てかくの如き人を司法官にしたら将来屹度有用の材になる」と推薦と身許保證をしてやつたら司法省の人々も立命館出身の人かと直ぐ採用して呉れた（中略）（就職は―筆者挿入）主として人物如何だが此の中で立命館が最も宜い。嘘だと思ふなら東京に行つて聞いてみ給へ。神戸であつた事だが多勢の知名の人が採用者の人物を種々調べて「立命館なら思想を尋ねるまでもない」と言つたと云ふ事である（四二）

一九三〇年以降、不況を背景として労働組合が多く形成され、労働争議が頻発し、大学生や中学生徒の左傾化が問題視されていた<sup>（四三）</sup>。この世相の中で、立命館学園の禁衛隊に代表される皇室中心主義教育を受けた生徒は、思想的に問題のない、品行方正な生徒だと世間に認識されていた。このような「立命館ブランド」による就職上の利点は、立命館学園のセールスポイントとなる。授業料頼みの経営をおこなう立命館学園において、この「立命館ブランド」を維持することで、学生・生徒を確保することは至極妥当な経営戦略であり、またそれは必要であつた。ここに、経営上の要請から立命館学園と禁衛隊は分かち難く結びつくこととなる。

最早、中川をはじめとする学園経営者が、禁衛隊的な教学を前面に押し出すことに對する違和感を抱いたとしても、これに代わる経営上の強みを見出せなければ、これを改めることはできなくなったのだ。そしてそれは、日中戦争や太平洋戦争の勃発にともなう政情・世情の変化によっても、叶うものではなくるのである。

## おわりに

立命館学園経営との関係から、禁衛隊創設の意図や禁衛隊の性質を明らかにすることを目的として、考察をおこなった。禁衛隊が創設された昭和初期の立命館学園は、大学昇格にともなう学園施設の拡充や、昇格に必要な巨額の供託金支払いのため、支出を増大させていた。これらの事業は必要なものであった。しかし、立命館学園はこれらの支払いを学園単体でおこなうことができず、校友に寄付金を再三にわたり募集することでこれらの支払いをおこなう有様であった。このような不健全な経営状況となった主要因は、立命館中学校の入学者数の減少と考えられる。生徒や学生からの授業料を主要収入源としている立命館学園にとって、学生・生徒数の減少は、すなわち収入源の縮小を意味していた。このため、立命館学園は経営状況改善のために、入学者数を増加に転じさせるためのなんらかの手立てを講じる必要に迫られていた。ここで立命館学園及び経営者中川が取った手段が、御大典という国家事業の場に、立命館学園から禁衛隊を送り込み、広告塔として全国各地に立命館の名を知らしめるというものであった。これは功を奏し、立命館中学及

び商業学校の入学者数は回復するのである。

すなわち、禁衛隊創設の意図とは、悪化していく学園経営の改善のための、宣伝活動、パフォーマンスをおこなうことであった。また、その活動は御大典限りのものであったと考えられる。禁衛隊とは学園の広告塔であったのだ。無論、これは学園経営との関係における禁衛隊の性質であり、中川や学園首脳部が禁衛隊に学生・生徒に対する教育効果を期待していたという従来の理解を否定するものではない。しかし、主目的はあくまで広告効果であり、教育効果はこれに附随するもの程度に考えられていたであろう。そうでなければ、御大典後数年にわたる禁衛隊活動の低調さや、杜撰ともいえる教学への利用の有様は理解できない。

その後、中学・商業学校の入学者数は再び減少する。ここで学園は再び禁衛隊を前面に押し出した宣伝パフォーマンスをおこない、入学者数の回復を成し遂げる。これが、本来御大典限りのものとして創設されたはずの禁衛隊が、立命館学園の看板となった契機であったと考えられる。御大典のような世間の耳目を集める場でなくとも、宣伝効果があることが認められたのである。また、禁衛隊を前面に押し出したことは、学生・生徒の左傾化が問題視されていた世相において、立命館は思想的に問題のない生徒を育てるといふ、「立命館ブランド」ともいふべき評価を生み出した。この「立命館ブランド」を維持し、入学者獲得に繋げることは、学園経営上妥当かつ必要なことであった。ここに、学園経営と禁衛隊は分かち難く結びつくこととなる。禁衛隊に代わるなんらかの経営上の強みを見出さない限り、これを改めることはできなくなったのである。これが、当初御大典における宣伝活動を目的として創設されたはずの禁衛隊が、昭和戦前期立命館の特色と評価されることとなった要因であろう。

太平洋戦争終結間際から終戦直後にかけての、立命館学園の異常にも思われる変わり身の早さを可能とした理由の一端も、このようなところにあるのかもしれない。

## 注

- (一) 立命館百年史編纂委員会『立命館百年史 通史二』（学校法人立命館、一九九九年）四四七―四四九頁。同書は以降『百年史』と表記。
- (二) 金井直彦「主として戦前の立命館学園についての幾つかの感想―立命館史編纂室に勤務して―」（『立命館百年史紀要』第一号、一九九三年三月）三二頁。
- (三) 奥田修三「戦前の立命館大学における教育と研究」（『立命館百年史紀要』第四号、一九九六年三月）七頁。
- (四) 寺澤優「中川小十郎の震災体験と民間警衛構想」（『立命館史資料センター紀要』、第二号、二〇一九年）。
- (五) 『立命館学誌』一一〇号（一九二九年）、二頁。同誌は以下『学誌』と表記。
- (六) 『学誌』一二六号（一九二九年）、三頁。
- (七) 『学誌』一二〇号、二頁。
- (八) 『学誌』一二〇号、一〇頁。
- (九) 『百年史』二七二―二八五頁。
- (一〇) 帝国大学学友会編『帝国大学大観』（帝国大学学友会、一九三九年）一〇二頁。
- (一一) 中川小十郎「大震雑感二」（『学誌』六七号、一九二三年）七頁。
- (一二) 大正末から昭和初期にかけては、関東大震災、北但馬震災、奥丹後震災等、地震災害が頻発した。これらの震災を契機とする学校建築の鉄筋コンクリート造への移行については文部省『学制百年史記述編』（帝国地方行政学会、一九七二年）五四八―五四六頁を参照。

- (一三) 『学誌』七二号(一九二四年)、二頁。
- (一四) 『百年史』四二〇頁。
- (一五) 『百年史』四二四頁。
- (一六) 『読売新聞』一九三〇年三月一七日夕刊。
- (一七) 『学誌』七二号、三頁。
- (一八) 『百年史』四二一—四二二頁。
- (一九) 『百年史』二三三—二三四頁。
- (二〇) 西川賢「統計 立命館大学：同専門部関係の学生・生徒数(一九〇〇—一九九五)」(『立命館百年史紀要』第四号、一九九六年)二五三頁。
- (二一) 『学誌』一二〇号、二頁。
- (二二) 『百年史』四四九頁。
- (二三) 『百年史』四五〇—四五三頁。
- (二四) 『百年史』四五四頁。
- (二五) 『百年史』四五八頁。
- (二六) 『東京朝日新聞』一九二八年一月一七日期刊。
- (二七) 『京都市出新聞』一九二八年一月四日夕刊。
- (二八) 『学誌』一二〇号、四頁。
- (二九) 同前五頁。
- (三〇) 同前一〇頁。
- (三一) 『学誌』一二〇号、一〇頁。
- (三二) 注(八)に同じ。

- (三三三) 『百年史』四五九―四六三頁。
- (三四) この間の禁衛隊について触れられている主な記事としては『学誌』一二三三号(一九二九年)「新卒業生諸君に告ぐ」、同「卒業生諸君を激励す」、『学誌』一二六号(一九二九年)「近畿皇陵巡拝を本学の年中行事に加へたい」、『学誌』一二九号(一九二九年)「立命館禁衛隊旗授与式」、同「禁衛隊旗授与式」、『学誌』一三〇号(一九三〇年)「小禁衛隊の桃山陵参拝」。『禁衛隊』一号(一九二九年)「商業学校の教育方針に就て(一)」、『禁衛隊』二五号(一九二九年)「本校の教育方針に就て(二)」、『禁衛隊』三号(一九二九年)「禁衛隊記念日」、『禁衛隊』四号(一九三〇年)「隊旗取扱方案」、『禁衛隊』八号(一九三〇年)「新学期を迎へて」、『禁衛隊』一七号(一九三一年)「入学生諸君、同「新入学生徒諸君」がある。これらはほぼすべてが、各種式典における中川や中学校長の式辞である。
- (三五) 『学誌』一二六号、三頁。
- (三六) 『禁衛隊』一四号(一九三一年)、二頁。
- (三七) 『学誌』一二〇号、二頁。
- (三八) 『百年史』五五五頁。
- (三九) 注(三二) および(八)に同じ。
- (四〇) 『百年史』五五八頁。
- (四一) 『立命館禁衛隊』二七号(一九三三年)、六一―七頁。
- (四二) 『禁衛隊』三三三号(一九三三年)、九頁。
- (四三) 『百年史』四六六―四六七頁。